勾欄雜考

七月（昭和八年）の東京劇場へ、文樂座の操が出張、三日目に狂言を搗替へて御目得をした。永い間大阪の淨るり小屋で聽いた淨るりと、東劇で聞く淨るりの「味」とが全く違つてゐるのに驚く。攝津大掾の晩年から、四橋の最近までの文樂座、近松座の櫓揚から、沒落までの毎月の興行。場末の女太夫の人形入りまで漁つたこの二十幾年の永の歲月に聽いた淨るり、見た人形に變りがない筈だに、東京劇場で聽くソレの味ひと全く勝手が違ふ。これは一つに劇場の構造、廣さ天井の高さから來る問題だ。燒けた御靈でも、現今の四橋の文樂座でも、小ぢんまりしたあの音響のこもる小屋である。だゝ廣い東劇では聲は往んだ限り、逝つて歸つて來ない。東劇の土間で聽いても、二階で聽いても、味ひがなくなつてゐる。今度の東劇の四並べの各狂言を、出來るだけ違つた場所で聽き、且つ觀た。すると、人形の方に、間ののびたマゴツキ、混雜は大分あつたが、これは大して人形の味を害ふほどではなかつた。或る舞臺は、あの無益なる廣い舞臺の袖隱しで、却つて人形の出が效果的であつた機會さへもがあつた。芝居の花道でなく、能舞臺の橋掛りのやうな一場面が出來て、將來この廣い舞臺で却つて面白からうかと思へたが、淨るりの方は殆んど絶望だ。聲の大きな太夫、聲量の豐かな太夫が、工夫を凝らせば、面白からうと思うてもみたが、いろ〳〵な實例は、こんな空想さへもが打壞はされる。あながち、今の太夫の非力ばか

りではなく、淨るりの細い音使ひの工夫が、到底あの廣い舞臺では、廣い看客席では、モノにならないのではないかと絶望された。

この東劇を替り目毎に聽いた。――そして別な目的で、――それは看客はどう「操」を見てゐるかと看客の態度、看客の會話に舞臺の感想を聞かうとして椅子蔦、廊下蔦をやつてみて、私は二つの大きな收穫を得た。

一つは、理解してゐるのか、ゐないのか、知らないが、看客は恐ろしく眞面目だ。操を見るに準備は缺いてゐるが、操の「味」を「知らう」としてゐる。この氣魄が東劇に澎湃としてゐた事。もう一つは、「東京」といふ土地柄、淨るり義太夫節が、根本に――市民性がありとすれば――市民性とは相容れられない音曲ではないか？　と疑はれた。この點を少し說明しておきたい。

第一の場合に揭げた、看客の眞劍なのには、實は私は驚嘆した。大阪の看客席に見られない一風景だ。大阪の看客は、純娛樂として操を見、操の「味」を「味はう」としてゐる。東京の看客は「味」を「知らう」としてゐる。こゝに大きな相違が現はれてゐる。

故に大阪では、舞臺が理解されなければ、倦怠が、場内に漲る。錢を出して二度とは來ない。その結果、淨るりの好者(スキシヤ)のみが、文樂座の華客となる。東京では、「味」を「知らう」としてゐる看客が多い。東京と大阪との兩都のお客のこの相違は、大阪では時尙に投ずればそれを育てる。相當つまらないものでも、成育さす長所を持つてる。が、東京は、出來上つたものを「請容れる」といふ態度だ。

されば大阪の文樂のお客は、操に新作を要求し、三味線の手の簡單化を叫び、その結果「藝」が潰滅になつても、捨てゝ顧みない。東京は將來は知らないが、一度「請容れて」時尙に投じないものが「操」ならば捨てゝしまはう。――といふらしい。

第二の場合を按ずるに、東京は江戸の昔から、他國人の集合都會なるに拘らず、江戸の風はイキが好みで、野暮は毛蟲のやうに嫌はれる。凡そ三味線で義太夫節ほどヤボなものはあるまい。江戸風の淨るりが、いつも上方の「當流」と違つた行き方で發達してゐる事、古來の歷史が證明してゐる。一例が、宮古路が江戸へ入つて豐後三流を生んだが、全く江戸育ち。血を分けた從兄弟仲である繁太夫と薗八とを、今比較して御覽なさい。血の繫りがあらうと思へないところに薗

八を育てた江戸の土があつたのだ。永い間にいろ〳〵な太夫が江戸へ下つても、江戸の當流淨るりは生れなかつた。この意味において、後の江戸肥前となつた豐竹新太夫といふ享保の太夫は、餘程の融通性に富んだ太夫だつたらうと想像される。

人形遣ひ方の樣式でもさうだ。竹豐兩座の人形が相當江戸へ下つたが、主なるもので、江戸に居付いたのは少い。――絶無だつた。それに反して辰松八郎兵衞が二代の八郎兵衞と、幸介が披露したのは江戸であつて、辰松座の後は江戸葺屋町で相當長かつた。そして上方では辰松の樣式は、早く亡んだ。こゝに辰松の突込人形の藝風が偲ばれる。かういふ風に、當流淨るりは江戸の人氣には合はなかつた。この風が、今の東京にも流れてはゐないか。その證據に、今日の東劇のお客に淨るりは何んとしても分らないやうだ。本格を破つた淨るりほど、粗雜な淨るりほど東劇に喜ばれてゐる現狀を見てつく〴〵さう感じた。

私どもは、人形と淨るりとは離して考へる事さへもが出來ない。何れが主も從もないに拘らず今日の人形のみが、藝術的だと言はれ、且つ、今の文樂では「遊び」の多い人形を藝術的だと見られて、ほんとの眞劍な「藝」が閑却されてゐる。卒直に實例でいへば、東京では相當な識者づ

れが、「文五郎の藝」がほんとだと思つて、「榮三の藝」を知らない。あの荒んだ文五郎の人形が「藝」に見える程度の看客席の眼と、耳とを知つて、あの東劇の看客の眞劍さが、なんの眞劍さなのかと疑うてみる。

言葉を換へると、東京の耳はヤボに語るを嫌ひ、口先の唄ふのを好んでゐるが、そんなのは當流淨るりでは斷じてない。人形では、「形」だけの振付師のやうな踊りが好きで、「人形の魂」を人形の藝に見る眼がない。――これだけは確かな事實だ。

私はこんな時評めいた事を書く考へがなかつたのが、こゝまで筆が辷つた。それよりも私は人形舞臺について、思ひ出す、古い舞臺の話を、何等かの資料にならうかと思つて、こゝに書いておく。

「操」の事を、今日「人形淨るり」と稱へて、「操」といふ言葉が、通俗的には、ともすると忘れ勝ちなのが、この頃の有樣だ。そして「人形淨るり」といふ言葉が、モノ足りないやうな熟さない言葉だと、この事もさる雜誌に私は書いた。ところで、「人形淨るり」といふ言葉が、いつ頃か

ら初つたらうか。近い事らしい。古くは皆「操」「操芝居」となつてゐる。「淨るり」の上に一語が冠さると、その淨るりの種類を現はすことになつてゐるのが例だ。卽ち「文彌淨るり」「古淨るり」「當流淨るり」の類である。これに「人形淨るり」といふと「素淨るり」に對しての言葉である。それにして「操」と「素語り」と對してゐるから「人形淨るり」といふ語の凡その用ひ初めが知りたかつたが、文獻には何の典據も得られないで、近く「明治」からの言葉であるだけが分つたのみであつた。ところが、五代目竹本春太夫が、明治五年正月松島文樂座の紋下となつた時の話に、春太夫が、

「人形淨るり」などと、「淨るり」の上に「人形」をおく事はどうもいかん。まこと「人形」のためやつたら、「淨るり人形入」といへ、淨るりの上へ「人形」をおく事は間違つてゐる。

と、憤慨した話が傳へられてゐる事を知つた。これによつて考へると、古來の言葉ならば、明治五年正月に、春太夫が、特にかういふ事を改めていふ筈がない。恐らく、この年に「人形淨るり」といふ言葉を使つたのであらう。と考へられる。卽ちこの松島の文樂座の表看板——櫓下看板に「官許人形淨瑠璃」と書かれたについて春太夫の抗議が生れたのであつた。——「明治五年」といふ年は、日本では、いろ〳〵な意味で、舊物を破壞し、新たな事が初めて行はれた年だ。極端な

急進思想、歐化思想から、この明治五年十月二日に太政官達を以て「遊女解放令」が「きりほどき」と稱して發布されたのも、この年である。社會の制度百般が、一朝にして改められた例が枚擧に遑がないが、それは措いて今は言はないが、文樂に限つても、稻荷の文樂軒芝居が、松島に移轉された年で、「文樂軒の芝居」が、「文樂座」となつたのも、この明治五年だと思ふと、この年に「操」といふ言葉を捨てゝ「人形淨るり」といふ言葉が生れたのである。されば こそ紋下春太夫のこの逸話が傳つてゐるのである。——これで「人形淨るり」と稱へた年代がハッキリとする。この春太夫は、泉州堺出身の太夫で、攝津大掾の越路太夫の師匠である。文樂座が松島にあつた時代の紋下で、淨るりも大聲の太夫だつたが、人物も大きい。越路の人氣が上りかけの時、越路の人氣を助けるために、藝人に珍しい自分を無にしたいろ〳〵な逸話が傳へられてゐる。

昔の太夫の風格は、世間放れのした人が多い。臺灣で死んだ先代の大隅太夫なども、その例に漏れぬ人だつた。一方からいふと相當非難のあつた非常識な處のあつた人だが、「藝」にかけると格別な處があつた。人々が彼を非常識と認めた例をいふと、因講は、昔から顏の最も古い人が、會長となり、會長の專制々度だが、攝津が會長となつた時に、攝津百年の後は、當然因講の會長

は、太隅太夫となる。アンナ分らず屋が會長となると、何をするか分らぬと、斯道の將來を憂へた人達が、會長の外に、會務を執る委員をおき、委員互選の委員長を、實務の主體としたのは、全く大隅が會長となつた曙を心配しての備へであつた。――これを見ても大隅の爲人が察知される。仲間でこんなに扱はれた人だが、藝道に對する熱意は又格段で、上下の見境の付かぬ稽古ぶりであつた。――といふのは、斯の道では、階級意識が强くて身分がやかましい。自身より少しでも顏の新しい人は、斷然後輩として取扱ふのを、大隅は、自分は彦六座の紋下であつても、自分の弟子でも、大序を語つてゐる他人の弟子にでも、稽古をして貰ふ。どんな詰らぬ太夫でも一句一語位はいゝ處があるから、それを敎はるのだといふのが大隅の見識だつた。一つは彼は貧乏に追はれどうしの內輪だつたから、稽古をしてゐる間だけでも借金の苦を忘れたと言はれてゐる手許であつた。大隅の女房が、朝から出掛けようとする彼を捉へて、けふ、今炊く米がないと訴へると、大隅は「米どころか俺は稽古に行かねばならぬ」と控へる女房の手を振拂つて飛出すのが、いつもの事だつたと傳へる。

死んだ攝津大掾の妻女お高が、口癖のやうに言つた事に、「今の太夫は樂だ、師匠(攝津の越路

時代）が古靱さんと『長局　の一日替りには、全く苦しみ抜いた。夫婦で苦しんだ」と言つてゐる。が、事實、古靱（初代）と越路との『長局』の掛合ひの、文樂における競演は、大阪の淨るり黨をうならした。古靱は、實に名人の藝。越路は當時人氣の出花であつた。この兩太夫の『長局』は、今に古い淨るり好の話柄に殘つてゐるが、公平な第三者の批判によると、越路は、手もなく蹴落されてゐる。これを見ても、古靱の藝は大したものであつたらしい。いつも話柄に出る如く、古靱が、御靈の席で殺された報を東京でえた六代目の綱太夫は、恐い太夫は、もう一人も無くなつたといつて、東京で弟子を集めて、酒宴を開いたといふが、このお高の話と併せ考へると古靱の藝風が想像される。――東劇の二回目に『長局』を聽いて、拙さに情けなくなり、眠くなりながら、この話を思出した。

近世では、攝津の越路の人氣は、一時は――長い間大したものだつた。嘗て越路太夫は土佐で大した人氣を博した。土佐は淨るりのやかましい處、越路がシンで、二枚目に三根太夫、友之助三枚目に鍛治太夫、叶。四枚目に組太夫、チンバの吉三郎。町太夫、鶴太郎といふ顏觸れで土佐で唸らした。この土佐の興行の樂の日に仕打は「どうぞ又、來て下さい」といふ挨拶で、何だか

言葉が殘つた。

その後土佐から、越路を買ひに來た。先年の「又來て下さい」「まゐりませう」の言葉が殘されてゐる。博勞町の越路の宅で妻女のお高の會つたのは、土佐の仕打の代表で、鮮屋の江戸庄といふ人だつた。お高は「行きませう。折を見て」と返事した。江戸庄はすぐ來てくれる事と思つて土佐へ歸つて、その旨返事した。處が、いつ來るのか、一向實現されない。使に立つた江戸庄が嘘をいつたのだらうと、土佐では問題が湧いた。改めて越路に當ると、お高の返事は「行きませうと確かに言つたが、いつ行くとは約束しない。御緣があつたら行かうといつたのだ」との事。江戸庄の進退は谷つた。

血の氣の多い、「江戸」を名にする江戸庄は、未練げもなく割腹して死んで了つた。越路夫婦は青くなつた。

これで、越路は身體の無理をして、土佐へ興行に行つた。この時に割腹した江戸庄の娘が、豫ねて法善寺の津太夫の許に、女太夫になるやうにと、預けられてゐた。勝七がこの娘を仕込んでゐたので、江戸庄の追善の意味が、この忘れ形見を連れて、土佐へ行き、師匠の勝七が、小娘の三味線を彈くといふ騷ぎで　土佐ではひつくり返へる人氣だつた。この勝七といふのは、今の鶴

澤道八の師匠である。越路のこの時の三味線は名人團平であつた。團平の妻おちかは極めて筆まめな女であるから、この江戸庄割腹事件の曲折を、おちかの日記にありはしまいかと探してみると、この時の事件は記してないが、明治十六年七月十六日から三日間江戸庄追善で高知へ行く、三日の定めを一日入れて四日打上げと記しあり狂言が列記してある。

初日『千代御殿』二日『猿廻はし』三日『中將姫』四日『野崎』とあり、一行は勝七、楢藏、榮屋、小三郎、春榮太夫の都合七人とある。そして右のやうな跡仕末の追善であつたから、一同は無給で、禮物の目錄が書き擧げられてある。

白縮緬一疋。木綿六反。白浴衣一反。松魚ぶし一箱。等等。

四代目竹本彌太夫は、馬方彌太夫と呼ばれた人で、鄕國阿波では馬方をしてゐたといふ話だがこの人の女房が死んだ通夜の折、屍體に向つて、彌太夫は「お前もはかない姿になりやつたな」と言つた。それが、淨るりそのまゝの詞と間であつたので、通夜の人々は思はずプッと吹き出しさうになつた。――この彌太夫は端場語りの名人で、『椎の木』をミス内で語つて、しかもあの名人三代長門太夫の『鮓屋』を喰つて了つたといふ位。この人の次に出る切場の太夫は恐れをなし

たといふ事だが、これもこの間、相生太夫の『椎の木』を聽きながら、東劇で思ひ出した事だ。

早稻田の演劇博物館へ、豐竹つばめ太夫と鶴澤重造とに來て貰つて、國文科の學生諸子のために、今淨るりに殘つてゐるいろ〳〵な「節」「風」を、實地に「標本」を抽出して示して貰つた。この時、今の若い重造氏を當日の聽衆に紹介しながら、私は思出したのだが、先代の鶴澤重造は大した名人だつたさうな。「豐後町」と俚稱さるゝ人だ。綽名を「つまみさん」と言つた。この人が、弟子を敎ふる時の三味線は、天井からぶら下げてあつて、莨を喫みながら、三味線を彈いて敎へる。よく弟子に「お前たちの淨るりならこのつるし三味線で結構だ。早う俺に兩手で彈かす太夫になれ」と云ひ〳〵してゐたといふ。ハラ〳〵屋の呂太夫とて、素人から太夫になつた名人太夫の『淡路町』は飛び拔けていゝ『淡路町』だといふのが定評だが、それはこの重造に稽古した傳來物だ。この初代の呂太夫は、自宅にゐると彫刻をやつたり、またお針がうまいといふ器用な人。二代の呂太夫も、同じく素人の呂篤から呂太夫を繼いだ人で、この人の實子が、演博へ來て貰つた鶴澤重造だ。初代の呂太夫の實子は、呂子太夫といつた人だが、本名は貞次郎、初めは三味線を彈いてゐた。半田流の柔道に達してゐて、米國へ航行した。淨るり太夫で、妻君が、西

洋人であつたのは、恐らく神武以來この呂子太夫一人だらう。この呂子太夫の妹が、大阪北陽新地における、明治末の名妓呂之助で、今は北陽伊東席の女將。現在の大阪素義界の立者柳平氏の寵妾である。

人形は、舞臺で、淨るりに連れて活躍してゐる。淨るりの文句が人形を動かしてゐるやうだが實は三味線で、人形が動いてゐるのだ。人形遣ひの三人が舞臺で使るものは、唯一つ三味線の間である。この間一つで人形はよくも惡くもなる。この三味線の間と人形の動作とは、ピツタリと吻合して、舞臺の藝が出來る。然る處、上方の狹い舞臺の三味線の間を目蒐けてゐる人形が、東劇の廣い舞臺に放り出されると、謂ふところの間が拔ける。こんな結果が、東劇の人形に到るところに逢着して、看てると危なかしい不安な心持がする。この三味線の手を今更に、簡單に彈けといふ阿呆をいふ空論家が世間にあるのだ。世の中の事は、よきもあしきも、進んだもの複雜になつたものを簡單に還元せよといふ事は、一片の空論だ。今日我が國民が漢字にどれだけ惱んでゐるかは、議論でなくして、漢字制限は、どうすればいゝか實際の問題だが、普遍的な新聞の用語にして、既に漢字は制限しても漢語の制限が實行されないから、漢字と假名とが混用されて、

却つて分らぬ事、不便な事を釀してゐるのだ。今日淨るりの三味線を簡單化せよといふのは、漢字の制限問題と同じで、一片の空論で何になるか。初代義太夫時代の三味線は、太夫の呼吸(イキ)の繫ぎにすぎないところから發達した。段々三味線の名手が出て、手が複雜になつた。三代鶴澤友次郎が、三味線譜を拵へて、三味線のツボを譜に記錄する事を、化政度に發明してから、手は加速度の勢を以て複雜化した。そして三味線の機構さへもに變化を與へ、三味線が大ぶりになつたのは、天保の初め頃からである。三味線の糸も七、五がけであつたのが、天保に九がけとなつた。九がけとは、一の糸一掛の目方九匁を要してゐる事を意味する。彈き手からいふと天保度の鶴澤文造、勇造、寛治等が出て、三味線は、淨るりの伴奏の境地から脫せんとした。完全に淨るり三味線に獨立の位地を與へたのは名人團平であつたらう。

太夫、三味線には系圖があつて、紛亂はしてゐるが、その系統はまた世間にも知られてゐる。然るに人形遣となると、何が何だか薩張分らない。古いところを系圖に立てゝ師弟の關係を明かにしたいと、私は今努めてゐるが、どの點までやれるか、自分にも、豫斷がつかぬ程、亡羊の嘆が深い。早い話が、明治期に入つて玉造系統だけでも、今日ハッキリしておかぬと、どうも怪し

くなるやうだ。既に玉助が二人ゐる事すら、もう世間では忘れてゐるやうだから、玉造系統だけを、一寸こゝに書付けておく。

初代の玉造は七十二歳で、明治三十七年十一月に死んだ。玉造の實子玉助が明治三十九年三月に二代玉造を繼いだ。玉助の弟子玉七が、二代玉助を繼いだ。初代玉助の弟子の玉松が三代目玉造を繼いだ。二代未亡人の苦情で、三代玉造を返へし、改めて玉藏を名乘つた。これがこの間死んだ玉藏だ。この玉藏の弟子が現在では玉松が筆頭門弟となつてゐる。そして現在の玉次郎は二代玉造の弟子。又今の文五郎は、この初代玉助の弟子といふ系統が、今現在の玉筋の狀態で、座頭の榮三には、定つた師匠がなかつた。樂屋で獨り苦勞して、名人達を悉く師匠と思つて自ら仕上げた自助の人が今の榮三である。これを表示しておくと

△初代玉造――實子二代玉造（元初代玉助）
　　――二代玉助（初代玉助ノ弟子玉七）
　　――三代玉造、後玉藏（初代玉助ノ弟子元玉松）

となる。

初代玉造は狐を遣ふ名人。早替りが得意。御池橋大寶寺町の炭屋町の突當りの北側に住んでゐたが、八幡筋が近いところから骨董いぢりが好きだつたが、よく西横堀で玉造が小頸傾けて、往來に立つてゐるのを見かける。何をしてゐるのかと思ふと、道端の犬の寢姿を、つく〴〵と見てゐる。犬の寢てるのと狐と同じだと言つてゐたさうだ。さうかと思ふと今日では滅多に出ないが『隅田川』のおくみや『道成寺』がうまかつた。おくみの可憐な姿が特に評判がよかつた。玉助の玉造は、頭でいふと源太モノがうまかつた。即ち治兵衛や忠兵衛は、今の鴈治郎は勿論の事、先代の延若や、霞仙など、生身の俳優の及ばぬ治兵衛、忠兵衛だつた。藝格からいふと、親の玉造よりは、この玉助の方が上だらう。世間で先代の桐竹紋十郎などを名人だといふが、これは今の文五郎程度の魂のない姿ばかりの美しい人形で、玉造には勿論及ばなかつたから、玉助に比較すると、ずつと藝格の劣つた人だつた。

初代玉造は元來は世話畑の人だが、荒物も遣つた。二代はボケ專門の人で、ボケが圖破拔けて巧かつたのだが、非力だから、荒物は絶對にダメだつた。玉藏は、何でもやつたが、何に圖拔けたといふものがないのは、中年の修業の悲しさだ。玉藏の父は道頓堀中芝居の樂屋番で、義理の兄はゲンマで通る源松といつた文樂の道具方で、仕掛物の工夫がうまかつた。その弟で玉藏の初

めは道具方だつたのが器用から轉じた中年者である。この間死んだ荒物專門の最後だつた文三は澁いおやぢが得意だつた。初代玉造の弟子の玉治の弟子で、元師匠名の玉治でゐたのが、明治四十三年二月に文三を名乘つた人だ。新町の出身だ。こんな事を思出しては限りがない。これでヤメる。

（昭和八、七）